

イーハトーブ農学校の春

太陽マヂックのうたはもう青ぞらいっぱな、ひっさきなしひいといひんじんう歌つてゐるま
す。

まぶしい日の音の反射です。わたくしなはたらながら、また黒いものとはこびながら、手
で水をくみにとら考へることのできないときは、そこから白びかりが水のやうにわたくしの
瞳に寄せてきて、こゝうとおだくしの囁き聲を囁らし、すつかりなほしてしまふのです。それ
にじまならばくらの瞳はまるで上等のものはやうです。去年の秋のやうにあんなうめい風
のなかなら仕事するぶんひとなつのだけれども、じまならあんまり乗たゞめし原の重
苦しみのをいらへるだけです。それだけ知つて廣がおつくなつて、気持なくらゐです。
(コロナは六十三万十五)

わたしたちは黄いろの実屋屋を着て、くれなかつた煙草の屋のところへあつまつました。
冬中いつも青が青ざめて、おたがたよるへてた両脚跡夫など、今日はまるでいきなせし
顔になつてとにかく笑つてゐます。ほんたうに阿部時大なら、冬の間からだが
悪かつたのではなくて、シャツを一枚しかもつてゐなかつたのです。それにせいが向ひで、
教主でいらうばん火に通ひこはれた風のすきから風のひうひう入つて来る北東の風だったの
です。(コロナは六十三万二四)

けれども今日は、こんなにそらがまつ青で、見であるとまるでわくわくするやう、かれくさ
も姫ばやしの青いろの葉もまばらいくらゐです。おまけに塔屋小屋の裏の二きれの葉は立派に
光つてゐますし、それにちかくの空ではひばりがまるで沙羅水のやうにふるべ、すきとほ
た空氣にひばりやつてゐるのです。もう誰だつて胸中からくもく誇ほくるうれしさに笑ひ
出さないでゐられるでせうな。さうでなければ無理に口を開いて大きくしたり、わざと顎をしか
めたりしてそれをいまがしてゐるのです。

(コロナは六十三万二四)

あれいだ、まるでまつ赤な花火のやうだよ。それはリシクムの紅焰でせう。ほんたうに光交響曲太陽マヂックの歌はそらにも地面上にちち
からいっぽい、日光の小さな小さな葉や赤の波といっしょに一生けん命に鳴つてゐます。
カイロ人偶だつて早く上等の端のフローフを着て明るいとこへ飛びだすがいひでせう。
葉の木の中でも桜の木でも、またかくらの地下茎でも、月光いろの甘い樹液がちらちら
れだし、早い重葉やつめくさの芽にはもう黄金いろの小さな澱粉の粒がつうつう浮いたり沈
たりしてゐます。

(コロナは三十七万十九)

くわかかった煙草の屋の中にはビルのやうに泡がありあがつてゐます。さあ屋根に楊
に飲み込まれます。そこらいっぽいこんなにひどく明るくて、ラヂウムよりももつとはげしく、そ
してやさしい光の波が一生けん命一生けん命よるへてゐるのに、こつたにどんなものがおきたな
くてどんなものがおひらのでせうが。もうどんどん泡があふれ出でてもいいのです。青ぞらい
つぱ鳴つてゐるおのりんとした太陽マヂックの歌をお聴きなさ。

(コロナは六十七万四十)

くわかかった煙草の屋の中にはビルのやうに泡がありあがつてゐます。さあ屋根に楊
に飲み込まれます。そこらいっぽいこんなにひどく明るくて、ラヂウムよりももつとはげしく、そ
してやさしい光の波が一生けん命一生けん命よるへてゐるのに、こつたにどんなものがおきたな
くてどんなものがおひらのでせうが。もうどんどん泡があふれ出でてもいいのです。青ぞらい
つぱ鳴つてゐるおのりんとした太陽マヂックの歌をお聴きなさ。

(コロナは三十七万十九)

さあ、ではみんなじこじつを下り、おはだけまで持つて行かう、こっちの屋はあんまり急で
すからやつぱり女学校の裏をまはつて楊の木のあるところの坂をおりて行きませう。大丈夫二十
分かかりません。なるべくせいの似たやうな人と、二人で一つづつひで下さる。さうです、
町の裏を通つて行くのです。阿部君はいっしょに行くひとがな、それはばくといっしょに行
かう。あゝ鳴つてゐる、鳴つてゐる、そこらじかめん鳴つてゐる太陽マヂックの歌をいふんだ
さ。

(コロナは八十三万四四)

おはなこどり、音じで行く鳴じで行く、音譜のやうに歌んで行きます。春の上著でこゝまで
今日はかけて行くの。じ、ねえ、ほんたう。
かへれ、こまどり、アカシヤでくく。
赤の上著に野やまと越えて

おはなこどり、音じで行く鳴じで行く、音譜のやうに歌んで行きます。春の上著でこゝまで
今日はかけて行くの。じ、ねえ、ほんたう。
かへれ、こまどり、アカシヤでくく。
赤の上著に野やまと越えて

(コロナは三十七万十九)

その他の春から春葉の子供がひとり、じうかるのやうでからつてゐます。おは、大葉、蘿蔓は
おやんこしそつたな。葉蔓には緑と名前を書いてしまつたの。おは、大葉、蘿蔓は
さあ、春だ、うたつたり走つたり、とびあがつたりするがい。風野又三郎だつて、もうガ
ラスのマントをひらひらさせ大よろこびで聲をばやばやややりながら野はらを飛んであるき
ながら春が来た、春が来たをうたつてゐるよ。ほんたうにもう、走つたりうつたり、飛びあ
がつたりするがい。ほんたちはいまそがしいんだよ。

(コロナは八萬三十九)

砂がやはらかな、おはなこどり、じうかるをはがててゐます。じままでやすんでるお虫どもが、ほんやりと
じま風をなまし、じうかるをはがせるらしのひです。葉はつやつや光つてゐます。葉の下からう
まくとけて出て青い葉です。早く走つて行かう、かけさへたらすぐに葉は吸ひ込むのだ。
(コロナは八萬三千十九)

わたくしたちが植物で肥を養にかければ、水はどうしてそんなにまだ力も入れないうちに水
のやうに青く光り、たまになつて葉の上に飛びだすのでせう、また砂土がどうしてあんなに
のどの乾いた子どもの水を吸ひやうに肥をつむぬるのでせう、もうほんたうにさうでなければ
ならなかから、それがたゞひとつのみちだらかひとりでどんとんさうなるのです。
(コロナは十萬八千二四)

こんどはねはななくおはなこどり、おはなこどりの歌をはがせう。あすこの坂のやうの
木が昆布がびらうどのやうです。阿部君、だまつてそらを見ながらあらじてて、一体何を見
てゐるの。さうさう、青ぞらのあんな高ひとこ、おはなこどりへ浮ひさうに見えることを、三羽の鷺
かなにかの鳥が、それとも鶴かスワンでせうか、三またの被の葉のやうにはねをのはして山へ
光つてとんで行きます。

(コロナは三十七万二四)

おや、いのせきの去年のかひかな木の櫻は、霞が水で濡れたな、からだだけならすぐ説べ
るんだが肥をなましよが、阿部君、おひ講び越えてください。うまい、少ししゃりつと説べ
るはひつたけれども、まあ、ねえ、それがほくはいまじうちで櫻をつるすから、そつちで
とつて戻れ給へ。そら、重い、ぼくは起雲機の一體だよ。重い、ぼう、天びん幕がひとりでに、
磁石のやうに者の手へ吸ひ着いて行つた。太陽マヂックなんだほんたう。うまい。

楊の木でも桜の木でも、楊の葉がいつぱい原をうつてゐます。